報 告

第56回全国学校保健研究大会 ならびに 第37回全国学校保健・学校医大会

第56回全国学校保健研究大会

11月9日(木)・10日(金)の両日、「生涯を通じて、心豊かにたくましく生きる力をはぐくむ健康教育の推進～心身の健康つくりに主体的に取り組む子どもの育成～」を主題として、島根県松江市の島根県民会館ほかで開催された。

初日の9日には、はじめに伊吹文部科学大臣（西阪　昇スポーツ・青少年総括官代読)、藤原大会実行委員会会長から主催者挨拶が行われ、その後、島根県松田副知事よりの祝辞、来賓の紹介が行われた後、「学校保健及び学校安全表彰」の表彰式が執り行われ、本道からは学校医として札幌市医師会の上埜会長、小樽市医師会の城会長のほか、学校歯科医として2名、学校薬剤師1名の方々が受賞された。

続いてアトラクションを挟み、元ＮＨＫでＮＰＯ子どもとメディア代表の清川輝基氏により『「子どもが危ない！」～“メディア漬け”が子どもを蝕む～』と題し講演が行われた。その中で氏は「人間の子どもを“メディア漬け”にして育てるとからだや心の発達にどんなひずみや遅れが現れるのか」「子どもたちが、からだも心も“人間になる”ために、今、何が必要なのか」「“メディア漬け”から抜け出すために、大人たちは、何をしなければならないのか」「子ども期に、人間としてのからだや心、コミュニケーション能力を発達させる時間と場所を奪われた子どもたちはどうなるのか」を中心に講演され、テレビ・ビデオ・パソコン等のメディアへの長時間の接触により、子どもたちは大切な活動時間が奪われ、外遊びをしなくなることによる手足の動きや立体視力の発達が損なわれたり、友達と遊ばなくなることによりコミュニケーション能力が育たなくなるなどの弊害が発生しており、これは乳幼児期のからだと心を作る大切な時間を奪ってしまった、子どもに対する大人の大罪であると話された。

また、氏はその対応として「ノーメディアチャレンジ」と題し、テレビやパソコンなどを消して生活する試みなどを紹介し、その活動の結果、子どもたちは「早寝早起き」「食事をきちんと摂るようになる」「遊びが豊かになる」などし、親子の会話も格段に増えたとの例を紹介されていた。

翌10日の第2日目には、市内各会場に分かれて全10題の課題別研究協議会が開催された。

来年度の第57回大会は香川県の高松市において11月8日(木)・9日(金)の両日開催される予定である。

第37回全国学校保健・学校医大会

学校保健研究大会の翌日の11月11日(土)、「立ち上がれ学校医!! 未来を担う子供達の健康を守ろう」をメーンテーマに、松江市のホテル一畑をメーン会場にて開催された。

午前中は4会場に分かれて、「からだ」「こころ」「耳鼻咽喉科」「眼科」をテーマにした分科会が開催され、そのうちの「耳鼻咽喉科」分科会において、本道から札幌市医師会の橋本紘治先生が「小中学校における選別聴力検査に対する評価－第3報－」をご発表された。

昼食を挟み開会式・表彰式が執り行われ、はじめに中島島根県医師会長(担当県)、唐澤日本医師会長から主催者挨拶の後、日本医師会長表彰が執り行われた。

その後、「学校医による健康教育の実践」をテーマにシンポジウムが、演題「小泉八雲と松江」による特別講演が、早稲田大学国際言語文化研究所長の池田雅之氏を講師として行われ、最後に次期担当県の香川県医師会森下会長による挨拶の後、盛会裡のうちに全日程を終了した。

－地域保健部－